

六、親の御恩

釈尊が舍衛国にいられた頃、阿難尊者は、ある日、街に出て、孝行な子供を発見した。一人の子供が盲の父の手をひいて乞食をして歩いている。軒に立って、好い食物を貰えば父にすすめて喜び、粗末なものを受ければ自ら頂く。誰も感心せぬものはない。阿難は精舎に帰って、仏に告げた。

すると世尊は、次のように言われた。

「それは感心である。よほど孝行人でないとは出来ないことだ。しかし、それでもまだ親の御恩にくらべたら何でもないことだ。」

昔、ある国の大王に、六人の皇子があつた。その六人の皇子が大きくなつた時、その国にラゴグという悪い臣があつて、むほんを起こして、上から五人の皇子を殺してしまつた。更に残の一人の皇子をも殺そうとすると、ある神様が皇子に、悪臣ラゴグの謀をつけて、早くここを逃げよ、と告げた。

そのことを聞いた皇子は顔も色青ざめて心配していられると、その妃が、

「皇子様は御病気ではございませんか。」と尋ねられると

「お前たちの知つたことではない。」と叱りつけたが、妃が、

「どうか私にも、ご心配がございますなら話して下さいませ。」

と涙と共に尋ねられるので、皇子は神様から聞いたことを話された。そこで、二人は相談して七日間の食事を用意して、一人の王子をつれて隣国へ逃げてゆかれた。ところが道を誤つて、三人は山の奥に迷つてしまつた。そして空しく七日間はすぎ、食事はなくなり、すでに十日目頃になると三人は餓死するより外は道がなくなつてしまつた。

そこで皇子が思われるには、「こんな山奥で、これから先何日で里へ出られるか知れない。このままでは三人とも命を捨てるより外はないであろう。それよりか、いつそ一人を殺して二人の命をつないだ方がいい。」と覚悟して、剣を抜いて妃を殺そうとせられた。するとその時、側で見えられた幼い王子は、父の手にすがつて、

「お父さま、どうかお母さまを殺さないで下さい。私がお母様の身代わりになりますから。」

と願われたので、父の皇子は、

「それでは可愛そうだが、汝を殺して、私達の命をつなぐことにしよう、決して情けない親だと恨んでくれるな。」

と王子の方へ剣をむけられると、王子は、

「お父さま、暫くお待ち下さい。お父様が今私を殺されたのでは、私の肉はすぐ腐つてしまひましょう。そうすればこの先又餓死なさるであります。ですから、毎日私の体から御入用だけの肉をおとりになるのがよいと存じます。」

王子の願いによつて、それから可愛い王子の肉を割いて、皇子は命をつないだ。

しかし不幸が続ぎ、王子の肉が三片位になっても、里に出る事が出来ない。その時王子は涙を流して、「お父さま、お母さま、私の肉も三片になりました。二片をあなた方に差し上げ一片を私が頂きます。私は一歩も歩けませんのでここへ留まりますから、あなた方は早く里へ御着き下さいませ。」と申された。皇子と妃は森に王子を残して空腹を支えつつ里へと急いだ。

その時、天上の帝釈天がにわかには震えるのでびっくりして、「何事が起こったのだろう」と占つて見ると、幼い王子の親孝行が判ったので、体を飢えた狼に化え、森に斃れるて居る王子の所に駆けつけた。

彼方此方と肉片を探す痩せ衰えた狼の姿を見た王子は、「己もこの一片の肉を食べた所で、どうせ明日までに死なねばならぬ。死に面した己の体を捧げて狼を助けてやろう」と決心して狼に体を差し出した。なさけ深い王子の心を眺めた狼は、忽ち自身の神の姿を現し、王子に向かい、

「お前は自分の肉を割いて父母を助け、命をおとそうとしているが、少しも恨めしくもくやしくも思わぬか。」

「いや、私は子として父母のために命を落としても当然の事と思いました。」

「私はお前の言葉を信ずることは出来ぬ、決して恨めしい心は少しもないか。」と尋ねると、王子は誠心を現して、

「私には少しも恨みも悔いもありません。もし少しでもいやしい心がありましたら、直ぐ私は死ぬでしょう。全くいやしい心がなかつたら、今ここで元の様な体に肉が盛り上がり、元氣を出して下さるよう、仏さまにお願いしましょう。」

2

と王子が一心に誓いの祈りをする、不思議に見るみる肉が盛り上がって、元氣がついて、元の達者な体になられた。それから、帝釈天も甚く感心して、王子と一しよに父や母を守って目的の隣国へ送りとどけた。隣国の王は幼い王子の孝行に感心して丁寧にもてなし、大勢の兵をくり出してラゴクを征伐されたので、またたくうちに、大王や、五人の兄皇子の敵をうつて、めでたく大王の位にのぼられた。

「阿難よ、その時の幼い王子は私であつたのだ。盲目の親を養う位の孝行は何でもあるまい。こんな難儀をしても、親の御恩は中々に報じきれぬものではない。」と御話になった。